

終わり なき愛

EVERLASTING
by Kathleen E. Woodiwiss
translation by Akemi Tachibana

キャスリーン・E・ウッディウイス
橘 明美[訳]

お 終わりなき あい 愛

2009年8月31日 初版発行

著者	キャスリーン・E・ウッディウス
訳者	たちばな あけ み 橘 明美
発行者	新田光敏
発行所	ソフトバンク クリエイティブ株式会社 〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13 電話03-5549-1201（営業部）
印刷・製本	中央精版印刷株式会社
デザイン	モリサキデザイン
フォーマット・デザイン	モリサキデザイン
カバー写真	©Beauty Archive/gettyimages ©Photoslendia.com/gettyimages
本文組版	アーティザンカンパニー株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。

定価は、カバーに記載されております。

本書に関するご質問等は、小社ソフトバンク文庫編集部まで書面にてお願いいたします。

江苏工业学院图书馆
藏书章

キャスリーン・E・ウッディウイス

終わりになき愛

ソフトバンク文庫

EVERLASTING

by Kathleen E. Woodiwiss

Copyright © 2007 by Kathleen E. Woodiwiss

Japanese translation rights arranged with Harper Collins Publishers
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

愛する読者のみなさまに、永遠の感謝をこめて本書を捧げます。

主要登場人物

アブリエル・オブ・ハリントン……十字軍で活躍したサクソンの英雄の娘

レイヴン・シーバーン……スコットランド王の特使

エルスペス……アブリエルの母

ヴェイチェル・ド・ジェラルド……アブリエルの義父でノルマンの騎士

バーウィン・オブ・ハリントン……アブリエルの実父で十字軍の英雄。決闘により命を落とす

ウェルドン・ド・マルレ……事故死したアブリエルの許婚^{いいなずけ}

デズモンド・ド・マルレ……ウェルドンの腹違いの弟で、アブリエルと結婚する

サースタン・ド・マルレ……ウェルドンとデズモンドの甥^{おい}

セドリック・シーバーン……レイヴンの父

コーデリア・オブ・グレイソン……アブリエルの親友。資産家の跡取り娘

レジナルド・グレイソン卿……コーデリアの父

イゾルデ夫人……コーデリアの母

一一三五年八月二十四日

アブリエルはその背の高い黒髪の男がレイヴン・シーバーンという名で、スコットランド王の使者としてこのウェストミンスター城に滞在しているスコットランド人だと知っていた。そしてもうひとつ、その男がさきほどからこちらをじつと見ていることも知っていた。それにしても、こんなにじろじろ見るなんて礼儀を欠いている。この日、アブリエルには宮廷の多くの男たちから視線が注がれていた。でもそれはおおむね賞賛と敬意をこめたまなざしで、このスコットランド人のようになずうずうしい視線ではない。

なにしろアブリエルは、つまりレディー・アブリエル・オブ・ハリントンは、何年か前に天に召されたサクソンの十字軍の英雄の娘であり、また聖地での武勇により人々の尊

敬を集めるノルマン騎士の義理の娘でもある。しかもそのふたりともが、今宵この宮廷で栄誉をたたえられることになっている。アブリエルはさつと目をそらすと、優雅な口調で城内の装飾をほめる母に頷いてみせた。大広間の両端には大きな炉床があり、暖炉には人の丈よりも高く炎が上がっている。すきま風を防ぐためにかけられたタペストリーには戦いや狩りの場面が織り出され、真紅と金の地に王の衣の青、深い森の緑があざやかに映えている。これほど荘厳、重厚な広間は見たことがない。しかも名誉なことに、アブリエルが今夜ここにいるのは国王に招かれてのことなのだ。

アブリエルはこの幸せを存分に味わおうと思っていた。実の父を亡くしてからというもの、また義父が経済的に苦境に陥ってからというものの、こんな華やかな場には久しく縁がなかったのだから。それなのに、くつろげない。スコットランド人の藍色の瞳がじつとこちらの動きを追っているかと思うと、どうにも落ち着かない。しかもその視線はアブリエルの心を乱すばかりではなく、なにやら不思議な力をもっていて、いくら無視しよう、目を合わすまいと思ってもどうしてもそちらを見ずにはいられない。それでもどうか自分を抑えて、横目でちらりと見るか、あるいはまばたきしながら長く黒いまつげの下でそつとようすをうかがう程度にしているのだが、でもそんなことをしなくても、その男がまだこちらを見ていることは十分にわかる。まるでその熱い視線が物質であるかのような熱と重みを感じるし、あるいはやわらかい羽根で肌をなでられているよ

うな気もして、どうしても無視できない。

それにしてもなぜこんなに動揺してしまうのか、自分でも不思議だった。すでにこの数日のあいだに何人もの男性がアブリエルに興味を示してきたのだし、この男もそのうちのひとりだと思えばなんということもない。なにしろ、母のエルスペスと義父のヴェイチエル・ド・ジェラルドとともにロンドンに着いてから、アブリエルはよき妻を求める貴族たちの注目の的になっている。ヴェイチエルはこれまで称号を得ていなかったが、十字軍での勲功に対して今夜こそヘンリー王からなんらかの爵位が授けられることになっていて、そのことはすでに貴族たちにも知れわたっていた。爵位を授ければ、それとともに土地と収入もついてくる。つまりアブリエルの持参金がぐんと上がることをだれもが知っている。だからこの数日、ウェストミンスター城内のヴェイチエルに割り当てられた部屋には、まず両親に、それからアブリエルに自己紹介しようとする男性がひっきりなしにやってきた。

ところが、あのスコットランド人は結婚を申し込もうと思つてこちらを見ているのではないらしい。その証拠に、見とれているといった表情をしながらも、決して近づいてこようとはしない。現にいまも大広間の反対側のヘンリー王のそばに立つたまま動かない。背が高く、たくましく、スコットランド伝統の帽子に格子^ブ縞^レの肩掛^イけ^ドというその姿はひととき目を引く。年は三十……もしかしたら三十二、三かもしれない。でも、その

男が会食の合図を待ちながら会話に花を咲かせる貴族たちのなかで目立っているのは、なにも外見だけが理由ではないようだ。そこにはなにか独特の、自然に身についた自信のようなものが漂っていた。

もちろんそう見えるというだけで、実際のところどんな人物なのかはアブリエルにはわからない。なにしろ大広間にひしめく貴族たちにさえぎられ、声も聞こえなければ、近くで見ることもしかない。ほかの男たちは次々に近づいてきて、気持ちのいい晩ですねとか、数千のロウソクに照らし出された宝物や絵画を指さして、ほら見事でしょうと話しかけてくるのに、スコットランド人はそうしない。そこでアブリエルははっとした。その男が近づいてこないことを少し齒がゆく感じている自分に気づいたからだ。でも、考えてみれば近づいてこないのはむしろ当然のことではないだろうか。スコットランド生まれで、デイヴィッド王の使者、つまり、アブリエルが生まれ育ったイングランドの北部地域をこの幾世紀にわたって脅かしてきたスコットランドに忠誠を誓っている男なのだから。

要するに、アブリエルにとっては気にかけるまでもない相手であり、それもこのような大事な日にはなおさらのことだ。今夜は、それこそ王の言葉次第でアブリエル自身の将来が決まる運命の日なのだから。待ち受けているのは希望だろうか、それとも絶望だろうか。与えられる爵位が高ければ、持参金も巨額になり、アブリエルはだれもが羨や

むような立場に立てるだろう。つまり、この国の名だたる貴族のなかから夫を選ぶことができる。

アブリエルは義父と母のほうをふり向いた。ふたりの興奮したようすを見るとこちらもますます誇らしい気持ちになる。いまから起ころうとしていることを考えただけで、アブリエル自身の胸にも迫るものがあつた。長年献身的な働きをしてきたヴェイチエルがようやく名誉を受けるのだと思うと心からうれしい。でもそれだけではない。アブリエルにとっては、今夜の儀式は亡き父の思い出に改めてひたる機会ともなるはずだからだ。今宵、国王は先の十字軍で戦った勇者たちをたたえるのだが、アブリエルの亡き父、サクソン人のバーウィン・オブ・ハリントンに対しても、その功績をたたえる言葉が手向けられることになっている。このノルマンの宮廷に今宵多くのサクソン人が詰めかけているのはそのためでもある。サクソン人たちはかの聖地で戦った友や親族に対してなんらかの敬意が表されるべきだと繰り返し訴えてきたが、とりわけバーウィン卿の死後そうした声が高まっていた。なぜなら、サクソン人にとっては、それがバーウィン卿を死に追いやったノルマン人に対する挑戦でもあつたからだ。バーウィンはあるノルマン貴族にそそのかされ、口論になったあげくに侮辱されて決闘に追い込まれた。しかも相手は器用に立ちまわって勝利をおさめ、バーウィンは命を落としたのだ。

三年ほど前からアブリエルの義父であり、今日もアブリエルと母をエスコートしてく

れているヴェイチエルは立派なノルマン騎士だ。十年もの長きにわたってエルサレムを守り、その働きぶりは多くの尊敬を集めている。でも、バーウインの功績がたたえられるとわかったときには、そのヴェイチエルも挑戦状を叩きつけられたように思ったにちがいない。そのことはアブリエルもよく承知している。ノルマンの英雄でありながらヴェイチエルにはなかなか栄誉が授けられず、ようやくここにきて騎士たちから今度こそあなたの番だと言われるようになっていたのに、そこへサクソン人のバーウインの話が伝わってきたのだから、さぞかし心の葛藤があつたことだろう。

栄誉といえば、それにふさわしいノルマン騎士をアブリエルはもうひとり知っている。十字軍の英雄中の英雄、そしてアブリエルの許婚^{いいなすけ}だつたウエルドン・ド・マルレのことだ。ウエルドンはイングラントに戻ってから城砦^{じょうざい}の建設にとりかかり、そのころアブリエルとの結婚をヴェイチエルに申し込んできた。ところが、砦^{とりで}も完成し、いよいよ明日は結婚式という日に急死し、アブリエルは未婚のまま未亡人のような立場に置かれてしまった。しかも普通の未亡人とはちがい、支えとなる甘い愛の思い出さえ残されなかつたのだ。

そんなわけで、ヴェイチエルの晴れの舞台であるこの日にも、愛するウエルドンの姿はここにはない。しかもその代わりに意外な人物が、アブリエルにとってはいてほしくない人物が出席していた。ウエルドンの腹違いの弟であるデズモンド・ド・マルレだ。見

るからに好色そうな醜怪な男で、丸々とふくれた顔に貪欲^{どんよく}で肉欲に満ちた目がくつついている。そもそもどうしてこの男が宮廷に入り込めたのか、アブリエルにはそれが不思議でならない。おそらく宮殿の小姓かなにかに金を握らせたのだろう。

アブリエルがデズモンドに初めて会ったのは結婚式の何ヵ月前のこと、ウェルドンから腹違いの弟だと紹介されたのだが、それ以来この不愉快きわまりない男はなにと理由をつけてアブリエルにまわりつくようになった。ウェルドンが死んでからはそれがますますしつこくなり、遠慮もなくこちらの生活にずかずかと踏み込もうとするので、アブリエルは恐怖さえ感じはじめていた。ウェルドンの事故死で悲しみの淵に立たされたばかりか、今度はその弟に恐怖を味わわされることになるとは、まったく思ってもみなかったことだ。デズモンドは以前かなり金に困っているようすだったのに、それがいまではウェルドンが残した遺産で左団扇^{うちわ}になり、それを餌^{えさ}にしてアブリエルを誘惑しようとしている。いまもこの大広間の熱気に顔をてらてらと光らせ、ぎよろついた目でこちらをながめまわして、アブリエルにはそれが苛立^{いらだ}たしくてたまらなかった。

こうなると、幼馴染^{おとこなじ}みで親友のコーディア・オブ・グレイソンと一緒にいてくれることがなによりも心強い。コーディアも家族とともにこのロンドンの祝いの行事に参加しているのだが、なにしろ資産家の跡取り娘なので、当然のことながら彼女もまた多くの男たちの注目を集めている。だから、今日出会った男たちについて、あとで品定めのお

しゃべりもできるだろうと、アブリエルはそれを楽しみにしていた。

いっぽうコーデリアのほうはというと、美しさといひ優しさといひ文句なしの親友に宮廷中の男たちが魅了されているのを見て、すっかり満足していた。なにしろアブリエルの美貌びぼうといひたら非の打ちどころがない。青緑色に澄んだ穏やかな瞳ひとみ、ほんのり染まった頬ほお、赤味を帯びた渦巻く金髪。どんな男性だつて降参するしかないだろう。ウエルドン卿にしても、アブリエルに結婚を申し込んだときもう四十五になろうとしていたにもかかわらず、それこそ若者のようにアブリエルに惚ほれ込んで、なんとしてでも妻に迎えたいと懇願したのだ。そして、アブリエルのことを幼いころから近くで見してきたコーデリアは、アブリエルのほうもウエルドン卿との婚約を心から喜んでいて、結婚が待ち遠しくてたまらなかつたことをよく知っている。だから、その死を知らされたときアブリエルがどれほどつらい思いをしたかもわかる。それだけに、彼女がようやく立ちなおり、こうして少しはほかの男たちにも興味を示しているのを見ると、ほっと胸をなでおろしたくなるのだつた。

角笛が高らかに吹き鳴らされ、宴うたげの始まりが告げられた。アブリエルと両親、そしてコーデリアとその両親であるレジナルド・グレイソン卿とイゾルデ夫人は、壇上に置かれたメインテーブルのすぐ手前のテーブルへと案内された。ひとときわ目立つ席に腰を下ろして、アブリエルはこれが自分の晴れ舞台なのだと改めて感じた。ドレスは母のお下

がりだけれど、でも三年前にヴェイチエルと再婚するときには仕立てさせ、結婚式で一度袖そでを通しただけで、そのあと大事に包んで木箱にしまっておいてくれたものだ。光沢のあるビーズと宝石をちりばめた深い青の刺繡ししゅうが華やかな襟もとから裾すそまでを覆う見事なドレスで、何人もの召使いが気の遠くなるような時間をかけて仕上げたものだった。そう、あのころはまだ裕福で、家にはたくさんの使用人がいたのに、それも過去のことになつてしまった。最近では、母娘で豪華な衣装をまとうて華やかな場に出ることなどめつたにない。

バーウインが生きていたころはなんの不自由もない暮らしだったし、母がヴェイチエルと再婚してからもしばらくのあいだは優雅な暮らしが続いた。ところがその後、ヴェイチエルが父親のウィローム・ド・ジェラルに裏切られたことをきっかけに、突如として生活が苦しくなつた。ヴェイチエルはウィロームから頼まれて多額の金品を援助し、ウィロームのほうも早々に返却すると約束していた。ところがそれを都合よく忘れたのか、財産をすべて長男のアランに残してこの世を去ってしまったのだ。しかもそのアランこそド・ジェラル家の資産を食い潰つぶした張本人だというのだから、納得のいく話ではない。

それに加えて、ヴェイチエルは配下の騎士たちにも用立ててやっていたので、せめてその一部でも取り戻さなければ一家は路頭に迷うことにもなりかねない。実際のところ、

今夜の報奨のことがわかるまでは、ヴェイチエルは文字どおり頭をかかえこんでいた。聖地からイングラントに戻ってきた騎士たちは、貴族たちが国庫の疲弊を理由に名誉も称号も与えようとしなかったために、みな多かれ少なかれヴェイチエルのように経済的に追い詰められている。そのいっぽうで、たいした功績もあげていないのにどこからか手をまわして称号と富をせしめる例も跡を絶たず、そのたびにヴェイチエルは不当な扱いだと憤慨してきた。といつても、ヴェイチエルは自分のために名誉にこだわっているわけではない。それはエルスペスのためだ。ヴェイチエルの最初の妻は愛想のない女で、産褥じよくのなか夫を呪のろいながら死んでいった。そのあとでようやく出会った理想の妻、ヴェイチエルがずっと夢に描いてきた理想の女性、それがエルスペスだった。だからヴェイチエルは生活が苦しくなることでエルスペスの愛と尊敬も失うことになるのではと、それをなによりも恐れている。そして、その心配を払拭ふっしょくできるかどうかはひとえに今夜の首尾にかかっている。

手を洗うお湯が運ばれてくるのを待つあいだに、アブリエルはあのスコットランド人が国王を囲んで歓談する人々とともにメインテーブルにいることに気づいて驚いた。するとコーディネリアが肘ひじでつついてきた。「ちよつとすてきな殿方じゃない？」

アブリエルは頬に血が上るのを感じて、あわててメインテーブルから目をそらした。

「そんな、国王陛下はもうあんなお年なのよ……」

コーデリアはくすりと笑ってささやいた。「アブリエルったら、ごまかさないで。あのハンサムなスコットランド人に興味があるのはあなただけじゃないんだから。今日ここにきている女性は、もういまごろ全員あの人の名前がレイヴン・シーバーンだって知ってるわ。スコットランドのデイヴィッド王の使者で、国を代表してこのノルマン宮廷に派遣されてきた大使だってこともね」

「まあ、スコットランド人がメインテーブルに？」アブリエルは驚いたふりをして聞き返した。そしてコーデリアが目をくるりとまわし、笑いをこらえようと口に手をやるのを見てようやくほえんだ。「でも、コーデリア、わたしたちの興味の対象にもならない男性がいるとしたら、それこそあの人のことじゃないかしら。ヘンリー王はデイヴィッド王の妹さんと結婚されたけど、それは和平を結ぶためでしょう？　あなたもわたしも北のほうでイン格蘭ド人がどんな目にあつたか知らないわけじゃないし、国境付近ではそれこそどちらの兵も残虐のかぎりを尽くしたんですもの、お互いに恨みは深いわ。あなただってそれはよくわかつてるはずなのに」

コーデリアは首を軽くかしげると、目をきらりと光らせた。「あら、それはどうかしら。女なら、すてきな男性と出会ったら、その人がどこの人かなんて関係なくなっちゃうものじゃない？　耳をくすぐるスコットランドなま訛りと男らしいほえみなんて、おだやかな夏の夜にはもってこいだもの」